

論文の内容の要旨

氏名：河村優詞

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題名：知的障害特別支援学級向け漢字指導プログラム開発に関する研究

本論文は小学校の知的障害特別支援学級向け漢字指導プログラム開発を目的とした研究であり、1章「小学校知的障害特別支援学級の社会的状況」、2章「漢字指導の社会的状況」、3章「調査」、4章「実験」、5章「指導プログラム開発と実用試験」、6章「総合考察」によって構成されている。

1章「小学校知的障害特別支援学級の社会的状況」では文献のレビューを行い、小学校の知的障害特別支援学級を取り巻く社会的状況を考察した。インクルーシブ教育の推進や合理的配慮の提供等、特別支援学級には様々な社会的要請がなされているが、教師の多忙さや教材の不足によって社会的要請に応じることが困難になっている可能性があり、教材開発等の推進が必要であると考えられた。

2章「漢字指導の社会的状況」では文献のレビューを行い、特別支援学級における漢字指導の重要性や、その周縁的領域における漢字指導に関する社会的状況を考察した。児童の将来の日常生活や就労に影響しうするため、特別支援学級在籍児童に対する漢字指導は重要な指導事項であると考えられた。しかし、実証研究とそれに基づく教材は不足していた。そこで、実証研究に基づく特別支援学級向け漢字指導プログラムの開発を本研究の目的とした。

3章「調査」では特別支援学級担任を対象に2つの質問紙調査を実施した。

調査1では特別支援学級における漢字指導の実態について調査した。特別支援学級では通常学級と比較してゆるやかなペースで漢字指導がなされている可能性があった。また、教師は漢字指導に関する様々な困難を感じていた。

調査2では特別支援学級において漢字教材に求められる仕様に関し、マスや文字の大きさを中心に調査した。特別支援学級では通常学級よりも大きなマス、大きな文字の漢字教材が必要であると考えられた。

4章「実験」は本研究の中心となる章であり、実証研究に基づく漢字指導プログラムの土台として、10個の実験を実施した。

実験1では、単に漢字の筆記を反復する条件、筆記の反復に加えて仮名を弁別刺激として漢字を筆記する条件、筆記の反復に加えて仮名と合った漢字を線で結ぶ課題を行う条件、以上の3条件で学習させた際の書きテストの成績を比較した。結果、仮名を弁別刺激として漢字を筆記する場合、成績向上が見られることがあった。また、仮名と合った漢字を線で結ぶ課題を筆記学習の後に行うと、一時的に成績が低下することがあったため、筆記学習の前や復習時に実施するべきであると考えられた。

実験2では、単に漢字を筆記する条件、振り仮名と交互に漢字を書く条件、プリントに挿絵を付す条件、以上の3条件で学習させた際の書きテストの成績を比較した。結果、振り仮名と交互に漢字を書く条件、プリントに挿絵を付す条件で成績向上が見られることがあった。

実験3では、筆記学習と併せて翌日学習する漢字を見せて次回予告をする条件、次回予告をしない条件間で、書きテストの成績を比較した。結果、次回予告によってテストの成績が向上する児童が存在した。

実験4では、漢字の筆記学習における集中練習・分散練習が、書きテストの成績に及ぼす効果を検討した。結果、分散練習の方が一週間後のテスト成績が高いことがあった。しかし、学習直後のテストでは、集中練習において成績が高い傾向があった。

実験5では振り仮名入り文章の音読が漢字読み成績に及ぼす効果を検討した。結果、音読のみで読みが獲得されるケースがあったが、成績上昇が見られない箇所もあり、補助的な指導方法として用いるべきであると考えられた。

実験6では児童の書字の正確性向上を図る方法として、自己評価および自己・他者評価の効果を検討した。結果、自己評価のみで書字に改善が生じるケースがあった。自己評価のみで改善が生じない場合、自己評価と教師による他者評価を併用する方法で書字の改善が見られるケースがあった。

実験7では筆順の修正について検討した。色・数字刺激によってプリントに筆順を示すことで、誤った筆順が修正された。また、1つの漢字の筆順指導が類似した構成要素を有する他の漢字に汎化し、複数の漢字の筆順が修正されることがあった。

実験8では漢字学習への従事を促進する方法として、高選好課題及び課題の選択機会を与える方法の効果

を検討した。結果、低選好課題の筆記回数が多い教材であっても、高選好課題や選択機会が後置されると児童から選ばれることがあり、課題従事を促進しうる方法であると考えられた。

実験 9 では児童の学習を阻害する要因として、誤字を消しゴムで消す行動の選好傾向を検証した。結果、消しゴムで消す行動を一貫して選好せず、消しゴムの使用が嫌悪的な事態であると考えられる児童が存在した。しかし、逆に誤答を周囲に見られることを避けるため、消しゴムで消す行動を選好する児童も見られた。したがって消しゴム使用の有無を児童に選択させることが望ましいと考えられた。

実験 10 では児童の日記記述において漢字使用を促進させる方法を検討した。日記内の漢字使用数を得点化して児童にフィードバックすることで、日記内での漢字使用率が増加し、児童内で得点を相互に称賛する事態が観察された。また、漢字を教師に聞く質問行動も増加した。

5 章「指導プログラム開発と実用試験」ではここまでの研究を基に指導プログラムを作成し、授業で用いて児童への有効性や教師の使用感を検証した。

実用試験に先立ち、ユニバーサルデザインに関する研究をレビューし、色覚の多様性に配慮することや誤答に対して寛容性のある教材とすること等、16 項目からなる教材開発のガイドラインを試作した。

また、集団への指導を実施するメインの実用試験実施に先立ち、予備実用試験を実施した。ここまでの研究結果をまとめてメイン教材、テスト、指導マニュアルからなる指導プログラムを作成し、重度知的障害を伴うダウン症児へ担任および支援スタッフが指導した際の効果を検証した。結果、従前には獲得されていなかった漢字書字 20 文字が獲得され、維持成績も良好であった。教師に対して使用感を問う半構造化面接を実施したが、指導プログラムに肯定的な印象をもっていると考えられた。

実用試験Ⅰ期では指導プログラムの改良を行い、筆者が児童 6 名に指導を行って、漢字を単に反復筆記する視写課題と本研究における指導プログラムの比較を行った。結果、視写課題で漢字書字獲得が進まない児童であっても本研究の指導プログラムで獲得が進み、維持成績も視写課題より良好であった。

実用試験Ⅱ期では細部を改良した指導プログラムを用いて 3 名の教師が 15 名の児童に指導した。全児童で筆記可能な漢字数が増加したが、誤答の多い児童も存在し、より誤答を減らして効率的に学習を進めるために改善が必要であった。また、教師に対して使用感を問う質問紙調査を実施したが、指導プログラムに肯定的な印象をもっていると考えられた。

実用試験Ⅲ期ではさらに改良した指導プログラムを用いて 3 名の教師が 11 名の児童に指導した。教師は経験年数 20 年以上の者を含んでいた。全参加児で漢字書字が獲得されたが、より誤答を減少させる方法を検討する必要性が残った。また、教師に対して使用感を問う質問紙調査を実施したが、指導プログラムに肯定的な印象をもっていると考えられた。

実用試験Ⅳ期では、教師が任意に選択・使用できるオプション教材を作成した他、指導プログラムの細部を改良し、3 名の教師が 12 名の児童に指導した。教師には、特別支援学校勤務経験者を含んでいた。全試行のテストが全問正答で完全に無誤学習となる児童が 4 名いるなど、全般的に高い指導効果が得られた。また、オプション教材のプリントを複数種類使用し、児童に課題の選択機会を与える方法をとることで、学習従事を拒否する傾向の児童も安定的に学習に従事することができた。教師に対して使用感を問う質問紙調査を実施したが、指導プログラムに肯定的な印象をもっていると考えられた。

ただし、実用試験Ⅳ期の参加教師 1 名より、指導プログラム全容が分かりにくい旨の意見を得た。そこで指導プログラムの全容が短時間で把握できるようにマニュアルを作成し、教師 3 名に評価を依頼した。結果、読むことに要した時間は全員 4 分以下と短く、その後実施した負担感などを問う質問紙調査では全教師からおおむね肯定的な回答を得た。

6 章「総合考察」ではここまでの研究を総括した。

本研究の有効性と独自性について、実用試験では多様な障害種、知的水準の児童に対して多様な経歴教師が指導を実施したが、一定の有効性のある指導プログラムを開発することができた。また、教師側の使用感について肯定的な回答を得ることができた。また、特別支援学級における漢字指導について児童・教師双方を対象とする研究はこれまでに見られず、独自性があると考えられた。

本研究の実験・実用試験では多くの児童が参加しており、実用試験Ⅱ期はほぼクラスワイド介入となっていた。個別指導を中心とした先行研究と比較すると規模の大きな研究であったと考えられた。

本研究の各実験・実用試験は保護者の同意を含む児童への倫理的配慮の下に実施され、社会的妥当性を確認しながら進行した。また、実験デザインにラテン方格図を用いるなど、今後の研究に応用可能であると思われる方法を含んでいた。

しかし、実用試験における漢字獲得のペースは、語彙獲得のペースを上回っていることが予想され、語彙

指導に特化したプログラムも必要であると考えられた。また、机上学習以外の生活場面に即した指導法も必要であると考えられる他、様々な課題点が残った。